

あの世の関所と〈最後の審判〉

－ルーマニアの事例－

早川 美晶（大阪市立大学）

ルーマニアのキリスト教絵画では16世紀以降しばしば「関所 Vămile Văzduhului」が描かれる。死んだ人間が「最後の審判」までの間を天国ないし地獄のどちらで過ごすかを定めるため、生前の所業を精査する空間のことである。関所は東方キリスト教世界で13世紀までに確立した観念であり、教義とは見なされないものの、死後の世界にまつわる民間伝承として受容されてきた。キリスト教美術における東方正教会の独自性を浮き上がらせる事例だが、先行研究では注目されずにきた。

東方正教会は「最後の審判」以前に死ぬ人間はそれに先んじて「私審判」で裁かれると考え、前者を「公審判」と呼んで区別し、神の裁きは公私2回におよぶ、との観念を育んだ。このため私審判の具体的な出来事である関所が絵画化されるとき、絵画化された公審判である〈最後の審判〉に影響を及ぼすことがある。それは〈最後の審判〉という主題が表現する時空の拡大である。また悪事の精査と断罪の場面が拡張することから〈最後の審判〉の主旨が、再臨するキリストが「万民を裁く」から「悪人を断罪する」へ変化しているとも指摘できよう。本報告では16世紀モルドヴァ地方と、18世紀マラムレシュ地方でそれぞれ教会堂壁画に現れる関所の表現を検討する。

教義として理論体系化されなかったことが影響し関所の表現にはバリエーションがあり、基本的には天使と悪魔が死者の魂を挟んで問答する様子で描かれる。天国に到達するまでに通過せねばならない関所は複数（その数は地域や時代により異なる）あるので、この問答する天使と悪魔が複数対並ぶことになる。

16世紀モルドヴァ地方の例では、現在3箇所の教会堂壁画で関所表現が確認される。これらの作例では、問答する天使と悪魔の描かれた四角い小部屋のような空間が垂直に積み重なる。それぞれの小部屋に「嘘」「食い道楽」といった罪名が銘文で示され、小部屋のひとつひとつが関所であることがわかる。これらの関所を下から一段ずつ昇った果てに、天国に到達できるさまが描かれている。

18世紀マラムレシュ地方の作例の場合、現在2箇所の教会堂壁画で確認される関所は、〈最後の審判〉の一部と化している。このうちカリネシュティ・カイエニの教会堂では、斜面に並ぶ小屋の群れとして描かれるが、16世紀モルドヴァの例とは異なり、上から下へと関所を一軒ずつ下りながら天国へ向かう。イエウドの教会堂においても、関所そのものの描かれかたはカリネシュティ・カイエニと異なるものの、上方から下りながら関所を通過するように描かれる。これは〈最後の審判〉において天国の門が画面全体の下部に配置される形式が既に固まっていたところへ、天国に入るための関門である関所を組み入れたためであろう。これらの〈最後の審判〉は今現在行われている出来事をも表現する絵画となるのである。